砂質土地盤における試作現場せん断試験機の適用性

村上俊秀(社会建設工学専攻) 鈴木素之(社会建設工学科) 山本哲朗(社会建設工学科) 葛城裕司((株)岡本土木) 池溝友謙(社会建設工学科)

An application of field shear test apparatus on sandy ground

Toshihide MURAKAMI (Graduate student ,Department of civil engineering) Motoyuki SUZUKI (Department of civil engineering) Tetsuro YAMAMOTO (Department of civil engineering) Yuji KATSURAGI (Okamotodoboku Co.,Ltd) Tomonori IKEMIZO (Student ,Department of civil engineering)

Natural slopes consisting of weathered granite rocks (Masado) have frequently failed during heavy rainfalls. In Yamaguchi prefecture, it is necessary to determine the strength of Masado using slope stability analysis. In order to obtain the in-situ strength parameters of undisturbed Masados, field shear tests using a field shear test apparatus were carried out at 9 sites in Yamaguchi and Hiroshima prefectures. The effect of the side friction and maximum grain size of the soils on the test results was investigated. Furthermore, constant volume shear tests were performed to remove the effect of the side friction.

Key words: Masado, Field shear test, Shear strength, Weathering, Box shear test, Skin friction, Dilatancy, Grain size, Constant pressure test, Constant volume test, Strength parameter

1. はじめに

山口県下では、豪雨時等を中心にして花崗岩からなる 斜面の崩壊が多発しており、乱さないまさ土の強度特性 を把握して斜面安定解析を実施することが大切である. しかし、まさ土は乱さない状態での試料採取が難しく、 試料の性質のばらつきや不均一性などの問題もあり、原 位置のせん断強度を求めることは容易でない.このよう な現状から本研究では、砂質土地盤のせん断強度を乱さ ない状態で直接測定できる簡易現場せん断試験機¹⁾を試 作した.本文では、これまでに実施した風化の度合いが 異なるまさ土地山の現場せん断試験結果について考察す るとともに、砂質土に対する本試験機の性能を強度定数 に影響を及ぼす周面摩擦力・試料の最大粒径の観点から 把握するとともに、定体積試験の適用性についても検討 した.

2. 乱さないまさ土の現場せん断強度特性

(1) 試験機および試験手順

本試験機の詳細は**文献**1)を参照されたい. Photo.1 に簡易現場せん断試験機を示す. 試験手順を簡単に述べ ると,①地山を平坦にした後,試料を供試体寸法よりも 大きく切り出す.②切り出した試料から供試体を整形す る.③試験機の設置場所を水平に整え,供試体周辺に豊 浦砂を敷く.④供試体に下部せん断箱を設置し,試験機 を順に組み立てる.⑤所定の垂直応力下で30分間圧密を 行う.⑥上下部せん断箱の隙間を1.0mm開け,せん断速 度1.0mm/minでせん断変位15.0mmまで定圧せん断する.

Sites	$\rho_{\rm s}$ (g/cm ³)	w _L (%)	w _Р (%)	I_P	Fclay (%)	F _c (%)	D ₅₀ (mm)	D _{max} (mm)	Soil Classification	Country rock	φ _{dF} ^{*1} (°)	c _{dF} *2 (kPa)
А	2.625	NP	NP	NP	5.6	16.9	0.550	9.8	SM	Granitic	30.7	27.1
В	2.617	31.7	27.0	4.7	3.0	11.5	1.010	10.9	S-M	Granitic	31.9	41.9
C ^{*3}	2.654	NP	NP	NP	4.8	20.5	0.255	7.8	SM	Granodiorite	13.5	23.0
D	2.639	NP	NP	NP	4.0	20.4	0.280	6.4	SM	Granodiorite	29.2	33.3
Е	2.644	NP	NP	NP	4.0	17.4	0.280	9.9	SM	Granodiorite	29.7	44.1
F^{*3}	2.614	39.5	31.7	7.8	7.5	26.8	0.330	9.6	SM	Granitic	29.2	45.4
G	2.663	39.3	34.7	4.6	7.0	92.2	0.015	3.7	ML	Granodiorite	11.2	71.7
H-1	2.614	40.3	35.5	4.8	7.5	34.0	0.270	5.1	SM	Granite	23.8	61.7
$H-2^{*4}$	2.614	40.3	35.5	4.8	7.5	34.0	0.270	5.1	SM	Granite	15.7	13.9

 Table 1
 Physical properties and test results of soil samples

*1 ϕ_{dF} : Internal friction angle obtained from in-situ test

*3 Submerged naturally (eg. Rainfall)*4 Submerged artificially





Fig. 1 Field shear behavior of intact sample

(2) 試験結果の一覧

Table 1 に現場せん断試験結果の一覧を示す.現場せん断試験は山口県内の7地点(地点 A~E, H)および広島県内の2地点(地点 F, G)の計9地点で実施した.各地点の物理的性質は試験実施箇所で採取した試料から得たものである.また,現場せん断試験の結果の中には,降雨あるいは人為的に水浸させて実施したものがある.地点 H-1, H-2 は同地点でそれぞれ非水浸および水浸条件で試験を実施しており,水浸による強度低下がみられる.

(3) 乱さないまさ土のせん断挙動

Figs.1 (a) および (b) にそれぞれ細粒分が比較的少 ないもの (地点 B, Fc=11.5%) と多いもの (地点 G, Fc=92.2%) のせん断応力 τ とせん断変位 D の関係を示す. Fig.1 (a) の場合, τ が D の増加に伴い,単調増加して おり, D=15mm でも τ の最大値はみられない. Fig.1 (b) の場合では, τ は D の増加に伴い単調に増加し, D=7.5 ~9.5mm のあたりで最大値を示した後に減少している.



Photo. 1 Field shear test apparatus (1998)

(4) 乱さないまさ土の強度定数

Figs. 2 (a) および (b) にそれぞれ地点 B (Fc=11.5%) と地点 G (Fc=92.2%) のせん断強度 $\tau_{\rm f} \sim$ 垂直応力 $\sigma_{\rm N}$ の関係を示す. $\tau_{\rm f} \geq \sigma_{\rm N}$ の関係における実測値は一つの 直線で近似できるが、見かけの粘着力が大きく得られて いる. この理由として、直接型せん断試験に特有のダイレ イタンシーに起因した周面摩擦力の影響² が考えられるの



Fig. 2 Relationship between shear strength and normal stress



Fig. 3 Relationship between internal friction angle and cohesion

で、このことについて詳しく3.(2)で述べる.

Fig.3は本研究に既往の研究結果^{3), 4)} を加えて乱さな いまさ土の $\phi_d \ge c_d$ の関係を整理したものである. 既往 の研究結果から,一面せん断試験の場合には ϕ_d =35°~ 45°, c_d =1.0 kPa~39 kPa, 三軸圧縮試験の場合には ϕ_d =36°~53°, c_d =1.5 kPa~73.5 kPa が得られている.本 研究からは、 ϕ_{df} =11°~32°, c_{df} =14 kPa~72 kPa 程 度が得られている.本試験は一面せん断試験や三軸圧縮 試験と比べ、乱さないまさ土の内部摩擦角を小さく、粘 着力を大きく与えているが、このことには供試体寸法や せん断機構など本試験機固有の因子が関係していると考 えられる.

(5) 風化度と強度定数の関係

Figs. 4(a) および(b) にそれぞれ乱さないまさ土の初 期間隙比 e_0 と強度定数 ϕ_d および c_d の関係を示す. 図に は西田らの研究結果³⁾を加えて整理している. 西田らは 初期間隙比を風化度の指標の一つとして取り上げ,初期 間隙比の増加にしたがって内部摩擦角 ϕ_d は減少し,粘着 力 c_d が増加するという結果を得ている.本研究において



Fig. 4 Relationship between initial void ratio and strength parameter

も同様な整理をしたところ,西田らが示した図中のフィ ッティングラインの妥当性を支持する結果が得られた. 一方,風化度の指標として細粒分含有率 Fc に着目して強 度定数 ϕ_{df} , c_{df} の関係を整理したものが Figs. 5(a) お よび(b) である. Fc が多くなるにしたがいFig. 5(a) に示す ϕ_{df} は小さく, Fig. 5(b) に示す c_{df} は大きくなる傾向がある.

山口大学工学部研究報告



Fig. 5 Relationship between fines content and strength parameter

3. 簡易現場せん断試験機の性能検定

(1) 試験機および試験手順

Fig.6 に模型地盤上に設置した本試験機を示す. 模型 地盤には加圧板側の反対側にロードセルを取りつけた反 力板が埋め込まれており(Fig.7参照),現場では測定不 能な反力板側の垂直力を測定することができる. 試験手 順は以下のようである. ①模型地盤を水平に設置し, せ ん断箱を設置する位置に撒き出し厚さ 3.0mm の豊浦砂 を敷く. ②下部せん断箱から順に試験機を組み立てる. ③せん断箱に試料を締固め法で詰める. ④所定の垂直応 力下で 30 分間圧密を行う. ⑤上・下部せん断箱の隙間を 1.0 mm 開け, せん断速度 1.0 mm/min でせん断変位 15.0 mm までせん断する.

(2) 強度定数に及ぼす周面摩擦力の影響

周面摩擦力を考慮してせん断面に実際に作用する垂 直応力を正確に把握するためには、供試体がせん断箱に 対して相対的な変位を生じさせない位置で垂直荷重を検 出する必要がある.そこで、反力板側に荷重計を埋めこ んだ模型地盤を作製し、豊浦標準砂 (D_{max} =0.425 mm, D_{50} =0.183 mm, F_c =2.80 %, U_c =1.48, ρ_s =2.343 g/cm³, e_{max} =0.944, e_{min} =0.611) に対して試験を行った. 試験では 実際の現場せん断試験を想定して、せん断中は加圧板側 の垂直力を一定に保っている(簡易定圧試験).供試体の 初期相対密度 D_{r0} は30%(初期間隙比 e_0 =0.84)と70%(e_0 = 0.71) の2通りとした.

供試体のダイレイタンシーに伴う周面摩擦力の発生 機構をFig.8に模式的に示す.周面摩擦力は供試体が膨 張する場合には鉛直下向きに、収縮する場合には鉛直上 向きに生じる.これより、反力板側の垂直応力 $(\sigma_N)_{lower}$ は加圧板側の垂直応力 $(\sigma_N)_{upper}$ に比べ、供試体が膨張 する場合には大きく、収縮する場合には小さく与えられ る.また、本試験機は二面せん断形式であるので、上部



Fig. 6 Field shear test apparatus installed on a model ground (1998)



Fig. 7 Outline of shear boxes on model ground



Fig. 8 Mechanism of skin friction force generated during dilatancy



Fig. 9 Relationship between shear stress, vertical displacement and shear displacement for loose sand



Fig. 10 Relationship between shear stress, vertical displacement and shear displacement for dense sand



Fig. 11 Stress path obtained from constant pressure test

せん断面と下部せん断面におけるせん断面上の垂直応力 は、厳密には異なっていることに注意されたい.

Figs. 9(a), (b) に緩い砂のせん断応力 $\tau \sim \pm$ 直変位 $\angle H \sim t$ ん断変位 D 関係を示す. せん断応力は単調に増 加して最大値を示した後,若干減少している. また, 垂 直変位はせん断過程を通じて収縮側に変化している. Figs. 10(a), (b) に密な砂の $\tau \sim \angle H \sim D$ 関係を示す. 緩 い砂の場合とは異なり, せん断応力は最大値を示した後, 著しく減少している.また,垂直変位はせん断初期に収縮側に変化しているが,D=3~5 mm 程度で膨張側への変化に転じている.本試験機においても緩い砂,密な砂の 典型的な挙動が得られる.Figs.11(a)および(b)にそれぞれ緩い砂および密な砂の簡易定圧試験における応力径路を加圧板側と反力板側の垂直応力の両方について示す.ここに,図中の(σ_N) upperおよび(σ_N) lowerはそれぞれ 加圧板側および反力板側の垂直応力である.両図ともせ

Sites	$\rho_{\rm s}$	W_L	Wp	IP	F _{clay}	Fc	Uc	U _c '	D ₅₀	D _{max}	Soil	Country	
Sites	(g/cm^3)	(%)	(%)		(%)	(%)			(mm)	(mm)	Classification	rock	
Obayama A	2.595	NP	NP	NP	3.0	13.96	14.33	1.86	0.64	12.4	S-M	Granitic	
	2.573	NP	NP	NP	4.9	16.61	30.80	2.99	0.53	4.75	SM		
	2.576	NP	NP	NP	4.8	20.15	40.00	4.01	0.45	2.00	SM		
	2.569	NP	NP	NP	6.8	25.08	44.44	4.00	0.31	0.85	SM		
	2.607	NP	NP	NP	2.8	8.02	15.83	1.69	1.30	15.0	S-M	Granitia	
	2.601	NP	NP	NP	4.0	14.03	21.43	2.38	0.86	4.75	SM		
Obayama B	2.613	NP	NP	NP	4.0	19.89	17.69	0.95	0.50	2.00	SM	Granuc	
	2.596	NP	NP	NP	8.1	25.17	52.86	0.05	0.27	0.85	SM		
Esakibarajyou	2.604	NP	NP	NP	5.5	18.19	7.23	0.36	0.96	13.0	SM		
	2.601	NP	NP	NP	4.1	19.35	55.56	2.69	0.66	4.75	SM	Granitic	
	2.604	NP	NP	NP	6.0	26.13	52.73	1.90	0.38	2.00	SM	Granitic	
	2.597	NP	NP	NP	9.0	36.20	45.64	2.27	0.17	0.85	SM		

Table 2 Physical properties of soil samples

ん断開始時に $(\sigma_N)_{lower}$ が $(\sigma_N)_{upper}$ よりも小さいのは 圧密時とせん断箱の隙間設定時に生じた周面摩擦力に起 因したものである. Fig. 11(a)の緩い砂の場合, $(\sigma_N)_{upper}$ で整理すると、内部摩擦角 ∮ ₫ 25.0° および粘着力 $c_d=21.2$ kPa, (σ_N) lower で整理すると、 $\phi_d=36.1^\circ$ および c_d=27.8 kPa となる. Fig. 11 (b) の密な砂の場合, (σ_N) upper で整理すると、 $\phi_{d}=38.7^{\circ}$ および $c_{d}=25.8$ kPa, (σ_{N}) lower で整理すると、 $\phi_d = 37.0^\circ$ および $c_d = 0.0$ kPaとなる. せ ん断の進行とともに、緩い砂の場合には負のダイレイタ ンシーを示すために、 (σ_N) lower は減少し、密な砂の場 合には正のダイレイタンシーを示すために、 $(\sigma_N)_{lower}$ は増加する. その結果として、加圧板側の垂直応力で求 めた強度定数は、反力板側の垂直応力から得られる値よ りも,緩い砂の場合は、 ϕ_d, c_d ともに小さくなる. 一方, 密な砂の場合には ϕ_d , c_d ともに大きくなる.本試験機は 二面せん断形式であるので、ダイレイタンシーもその分 大きく、現場せん断試験で得られた強度定数は周面摩擦 力の影響を多分に含まれていることを念頭に入れる必要 がある.

(3) 許容粒径の検証

強度定数に及ぼす影響因子には、先の周面摩擦力の影響の他に、粒径の影響が考えられる.本試験機のように 供試体が剛なせん断箱と加圧板、反力板で囲まれている ため、供試体の変形に及ぼす拘束の度合いが強く、粗粒 材を試料として用いればせん断強さが過大に評価される 可能性がある.

Table 2およびFigs. 12(a) ~ (c) にそれぞれ用いた試料 の物理的性質と粒径加積曲線を示す.各試料の最大粒径 を 0.85, 2.00, 4.75mm および原粒度の4 種類にふるい分 けした自然乾燥砂を対象に供試体密度を $D_{r0}=30\%$, 70% の 2 通りとして簡易定圧試験を行った. Figs. 13(a), (b)







Fig. 12 Grain size distribution cures of soil samples

にそれぞれ緩い砂,密な砂の内部摩擦角 ϕ_d と最大粒径 D_{max} の関係を示す.ここで用いられている ϕ_d は $(\sigma_N)_{lower}$ で整理した値(せん断面上の垂直応力)であ



Fig. 13 Relationship between internal friction angle and maximum grain size



Photo. 2 Reversal box shear test apparatus (After Nakamori et al. 1996)

る. 両図とも最大粒径が大きい試料ほど ϕ_d は大きい傾向 にある. Fig. 13(b)の小羽山 A の場合のみ,原粒度の試 料において過大な ϕ_d が得られている.緩い砂,密な砂と もに4.75mm以下の最大粒径による ϕ_d の顕著な差はみら れず,本試験機においては粒径の影響は小さいものと考 えられる.

(4) 一面せん断試験結果との比較

本試験機の現場せん断試験としての妥当性を検証す るために、直径 6cm、高さ 2cm の供試体に対して一面せ ん試験を実施した.今回使用した一面せん断試験機は、 本来繰返し一面せん断試験⁵として用いられており、新 たに反力板側にロードセルを設置することにより簡易定 圧試験を可能とした.Photo.2 および Photo.3 にそれぞ れ繰返し一面せん断試験機とせん断箱の概要を示す.試 料には Table 2 で示した最大粒径 D_{max}=0.85mm 以下の試 料を用い、締固め法により詰めた.試験条件は、所定の 垂直応力下で 30 分間圧密させ、上・下部せん断箱の隙間 を 1.0 mm 程度開けたのち、せん断速度 0.20 mm/min でせ ん断変位 7.0 mm までせん断させた.

Fig. 14 は簡易定圧試験により本試験機および一面せん断試験機から得られた ϕ_d との比較を示している.本試験から得られた ϕ_d は一面せん断試験から得られた ϕ_d の



Photo. 3 Outline of shear box



Fig. 14 Comparison of internal friction angle obtained from field shear test and box shear test

値とよく対応しており、供試体寸法、せん断速度および せん断機構が異なる試験であることを考慮すると、概ね 妥当な結果が得られている.



Fig. 15 Stress path under constant volume test on loose sand



Fig. 16 Stress path under constant volume test on dense sand

4. 簡易現場せん断試験機による定体積試験の適用性

(1) 試験手順および試験方法

3. (2) でも述べたように、砂質土では供試体とせん断 箱との周面摩擦力が大きいため、本試験機を用いて定圧 試験を行う場合には、反力板側の垂直応力で整理される ことが望ましい.しかし、現場せん断試験では地山と供試 体底面との間でせん断するため、反力板側の垂直応力を 測定することは不可能である.このような理由からせん 断時に周面摩擦力を生じさせず、加圧板側の垂直応力で 整理できる定体積試験について検討した.

試験手順および試験方法は定圧試験の試験条件と同様であるが、せん断過程において体積を一定にするために、垂直変位の変動幅が±0.01mm以下になるように油 圧ポンプで制御している.試料には豊浦標準砂および Table 2 で示した最大粒径 D_{max}=0.85mm以下の試料を用 いた.

(2) 試験結果と考察

定体積試験結果の一例として,小羽山Bによる試験結 果をFig. 15 およびFig. 16 に示す.それぞれ緩い砂およ び密な砂の定体積試験における応力径路を加圧板側と反 力板側の垂直応力の両方について示す. Fig. 15 の緩い砂 の場合, $(\sigma_N)_{upper}$ で整理すると,内部摩擦角 $\phi'=36.9^{\circ}$ および粘着力 c'=8.6 kPa, $(\sigma_N)_{lower}$ で整理すると, $\phi'=41.3^{\circ}$ およびc'=20.0 kPa となる. Fig. 16 の密な砂の 場合, $(\sigma_N)_{upper}$ で整理すると, $\phi'=41.0^{\circ}$ およびc'=7.0 kPa, $(\sigma_N)_{lower}$ で整理すると, $\phi'=41.7^{\circ}$ およびc'=22.0 kPa となる.両図ともせん断開始時に $(\sigma_N)_{lower}$ が $(\sigma_N)_{upper}$ よりも小さいのは圧密時とせん断箱の隙間設定時に生じ た周面摩擦力に起因したものである. 圧密応力の低減は 緩い砂で 38%,密な砂では 48%程度である. $(\sigma_N)_{upper}$ で整理した内部摩擦角は $(\sigma_N)_{lower}$ で整理したものより も 1°~4°程度小さくなっている.

定体積試験から求まる ϕ 'は定圧試験の ϕ_d の代用となることを考慮し、Fig. 17 は定体積試験において $(\sigma_N)_{lower}$ で整理した ϕ 'と簡易定圧試験において $(\sigma_N)_{lower}$ で整理した ϕ_d との比較を示している. せん断面上の垂直応力で整理しているため、定体積試験の $(\sigma_N)_{lower}$ で整理した ϕ_d は概ね一致している.

Fig. 18 には定体積試験における $(\sigma_N)_{upper} \geq (\sigma_N)_{lower}$ で整理した ϕ' との比較を示している. $(\sigma_N)_{upper}$ で整理



Internal friction angle obtained from receiving plate under constant pressure test ϕ_{d} (°)



した ϕ 'は (σ_N) lower で整理された ϕ 'と 1° ~6° 程度の 差がある.このように,直接型せん断試験における定体 積試験では圧密時に供試体の1次元圧縮に伴う周面摩擦 力によりせん断面上の圧密応力が低減するため,せん断 時にもその影響が残したまま評価される.しかし,この 程度の内部摩擦角の差は現場におけるその他の要因によ る誤差を考慮すれば許容できる範囲と考える.現状では, ϕ_d と関連づけた ϕ 'を決定できる現場定体積試験の有用 性は十分あるものと考えられる.

5. 結論

本研究で得られた結論は以下のとおりである.

- (1)本現場せん断試験においても乱さないまさ土から得られた強度定数は、内部摩擦角は初期間隙比および細粒分含有率の増加に伴って小さく、粘着力は初期間隙比の増加に伴い大きくなる傾向を示している.
- (2)本現場せん断試験機における試料の最大粒径が内部 摩擦角に及ぼす影響は大きくない.最大粒径 D_{max}=4.75mm以下の試料では,緩い砂と密な砂とも に強度定数はほぼ一定であるので,砂質土地盤にお ける適用性は十分にある.
- (3) 本現場せん断試験機において周面摩擦力を考慮すれ ば、簡易定圧試験より得られた φ_d は一面せん断試験 から得られた φ_dの値と概ね対応しており、強度試験 としての妥当性を有している.
- (4) 定体積試験の反力板側での垂直応力で整理した φ'と 簡易定圧試験の反力板側での垂直応力で整理した φ_d は概ね一致している.



Internal friction angle in terms of receiving plate under constant volume test $\phi^{+}(^{\circ})$

- Fig. 18 Comparisons between internal friction angle in terms of loading plate under constant volume test and internal friction angle in terms of receiving plate under constant volume test
- (5) 定体積試験結果において加圧板側と反力板側のどち らの垂直応力で整理してもφ[']は1°~6°程度の差で あり,実際には加圧板側の垂直応力で整理する現場 定体積試験としての有用性は十分ある.

謝辞

現場せん断試験機の製作でお世話頂いた(初中原鉄工所 中原 信氏, 繰返し一面せん断試験機は㈱復建調査設計所 有のものをお借りした. 試験の実施でご助力を頂いた当 研究室卒業生の兵頭英樹氏(現 ㈱大林組)および当研究 室学生諸氏に深甚なる謝意を表する.

参考文献

- 山本哲朗,鈴木素之,村上俊秀,三浦壹章,芋岡敏 彦:試作現場せん断試験機による斜面土のせん断強 度測定,地盤と建設, Vol.17, No.1, pp.27~33, 1999.
- 村上俊秀、山本哲朗、鈴木素之、三浦壹章、芋岡敏 彦:試作現場せん断試験機の性能検定−周面摩擦の 影響−、土木学会第55年次学術講演会、Ⅲ−A31、 2000.
- 西田一彦,青山千彰:物理強度特性からみた乱さな いまさ土の分類,土木学会論文集,No.352/Ⅲ−2, pp.159~168,1984.
- 地盤工学会編:風化花崗岩とまさ土の工学的性質と その応用、土質基礎工学ライブラリー16、地盤工学 会、pp.40, 1993.
- 5) 中森克己:第三紀層地すべり粘土のせん断強度特性 および地すべり機構に関する実証的研究,大阪市立 大学学位請求論文,1996.

(平成12年12月27日受理)

山口大学工学部研究報告